

第3章 西トップ遺跡にみられる上座部仏教に属する新たな要素

奈良文化財研究所 佐藤由似

はじめに

既往研究において、西トップ遺跡は、碑文から9世紀にはじまり、アンコール王朝崩壊後のポスト・アンコール期にあたる15、16世紀まで存続すると考えられていた。しかし、これまで具体的な考古学的研究は皆無であり、M.ジトーとA.トンプソンによる図像学的見地に基づいた研究が評価されている(1,2)。近年の奈良文化財研究所によって、西トップ遺跡に関する考古学、建築史学ならびに保存科学各分野からの調査が遂行され続けている(3)。とりわけ、西トップ遺跡においてはアンコール王朝末期に当たるポスト・バイヨン期以降に属する遺物や建築装飾が多く、特筆に値する。たとえば、ペディメントに表された触地印仏陀坐像や北祠堂偽扉にみられる仏陀立像などは、西トップ遺跡を代表するポスト・バイヨン期以降に属する図像であるといってよいであろう。これらの図像はアンコール地域に上座部仏教がもたらされたごく早い段階に属する可能性がある(4)。しかし、祠堂本体構造の不安定化等々、様々な要因が重なり、三祠堂の解体修復作業を執り行うこととなり、第一段階として南祠堂の解体が作業が始まった。この解体作業に伴って、新たな発見がみられたので、ここに紹介したい。

第1節 南祠堂基壇から発見されたセマ石

現在みる西トップ遺跡は、中央祠堂とその両側に南祠堂と北祠堂が並び、中央祠堂の東正面にはテラスが張り出している。これらすべての祠堂群を取り囲む形でラテライトの石列とセマ石が寺域を形成している(図1)。セマ石はラテライト石列の四隅と各辺の中央に配置されていることが、これまでの調査で判明している。一連の南祠堂の解体作業に伴い、新たに上成基壇と下成基壇構成材から複数のセマ石が発見された。

これらのセマ石は上成基壇のうちN12から3石(図2)、N14から2石(図3)、N15から3石(図4)、N16から5石(図5)、下成基壇のN24から2石(図6)が確認されている。各石材の寸法等詳細は『南祠堂解体作業中間報告1』(4)に詳しいが、今回南祠堂から発見されたほぼ全てのセマ石は頂部が3つに割り込まれた様式で(図7)、地上にでる部分は丁寧に成形されるが、地中に埋もれる基部は未整形である。現在西トップの寺域を形成するセマ石の頂部には割り込みがなく、全体が蓮弁を象ったような砲弾型の形を呈しており、今回発見された頂部が3分割されるセマ石とは様式を異にする(図8)。

これらのセマ石は一見乱雑に組み上げられているように見えるが、基本的には基壇の階段部付近、すなわち出入口として重要な位置を中心に配置されているように見受けられる。この傾向が顕著なのがN24である。N24で発見されたセマ石は明らかに、南祠堂下成基壇階段最下段の直下に据えられており、意図的に配置された可能性が推測される。セマ石は元来、仏教と密接に関係し、仏教寺院や仏教テラスの寺域を形成する宗教的な意味を持つ石である。南祠堂では転用材としての利用ではあるものの、セマ石のもつ信仰・宗教的な意味合いを保持したまま配置され、南祠堂に組み込まれたものと考えられる。

南祠堂から発見された14石のセマ石は、転用材として認識することが可能であるが、どの遺跡からもたらされたものかに関しては判然としない。しかし、南祠堂建立時期が14世紀代を上限とする時期に比定できることから、少なくともそれ以前にセマ石がどこかの上座部仏教寺院または仏教テラスに使用されていた可能性を示唆するものである。すなわち、上座部仏教のアンコール地域への流入が14世紀代を遡る可能性が出てきたと考えられる。

カンボジアにおけるセマ石の型式分類については、先述のジトーによる先行研究が唯一であるが(6)、中世以降の上座部仏教寺院に伴う装飾性の高いセマ石を中心としているため、アンコール王朝末期やアンコール・トム内に見られる仏教テラスのセマ石を詳細に分類したものではない。そこで、現段階における初期的な作業として、アンコール・トム内に位置する仏教テラスと呼ばれる主なテラス寺院のセマ石を列举し、西トップ遺跡のセマ石と比較することとした。アンコール・トム内にある全てのセマ石を捉えたものではないが、大まかに見て、地上露出部分の形態の差で3タイプに分類することが可能なようである。便宜上、仮にタイプA、B、Cと本稿では呼ぶこととする。タイプAは頂部が3つに分かれもの、タイプBは砲弾型を呈した装飾性の低いもの、タイプCは砲弾型の頂部に蓮の蕾が載るものである。この差異が年代差に拠るかは現段階では結論付けることは時期尚早である。しかしながら、西トップ遺跡におけるセマ石のうち、南祠堂内から発見された14個体はタイプA、西トップの寺域を形成する原位置に据え置かれたセマ石はタイプBにあたる。アンコール・トム内テラス寺院のうち、タイプAはKok Thlok(図9)、タイプBはTep Pranam(図10)、Vihear Prampil Loven(図11)、タイプCが最も多く、Preah An Thep(図12)、Preah Ngok(図13)、Vihear Prampil Loven(図14)、Vihear Prambuon Loven(図15)、Preah Pithu(図16)であった。Vihear Prampil Lovenには2タイプ見られた。

今回西トップ遺跡南祠堂解体に伴って、新たなセマ石が発見されたことにより、セマ石研究がアンコール・トム内における上座部仏教寺院の形成過程ならびにポスト・バイヨン期からポスト・アンコール期にかけての移行期に関する様相解明に向けた重要な要素になるといえよう。

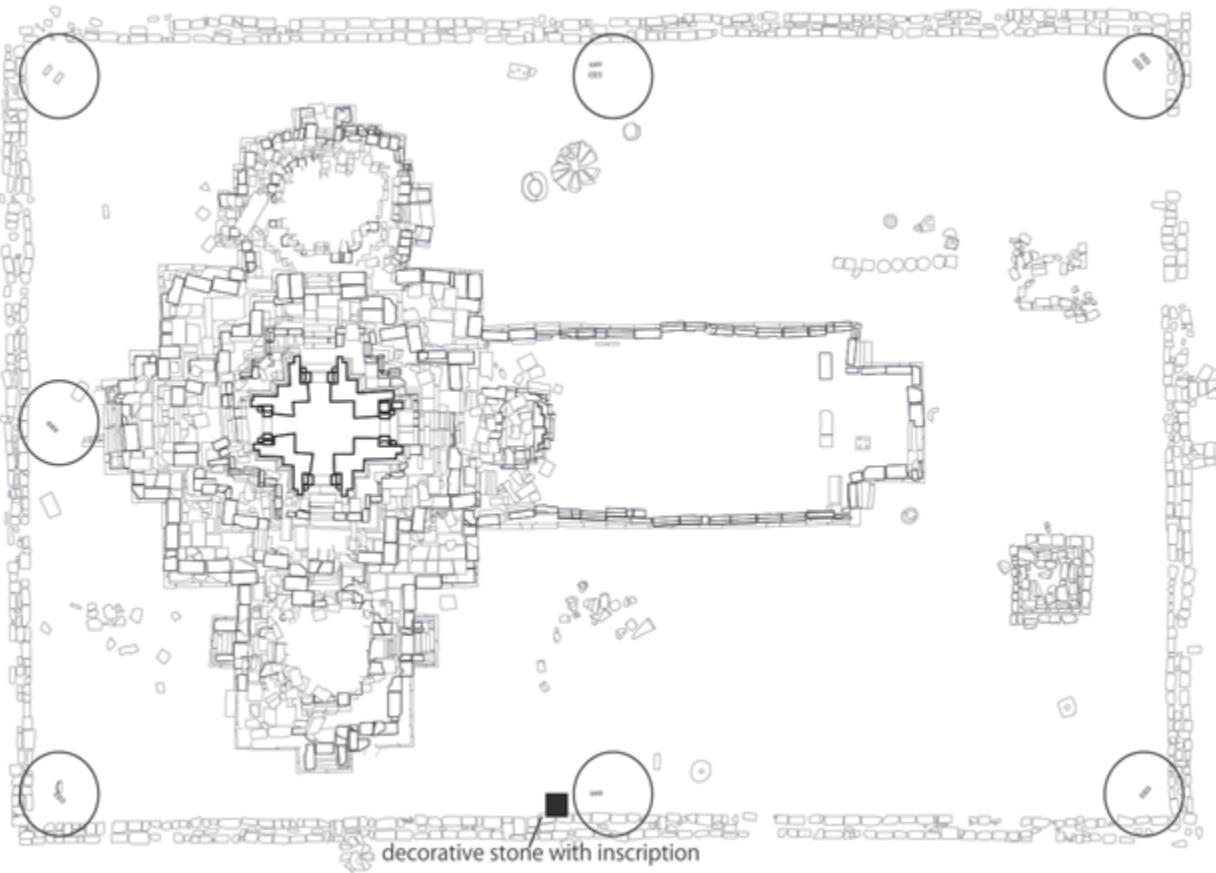


図1 西トップ遺跡セマ配置図

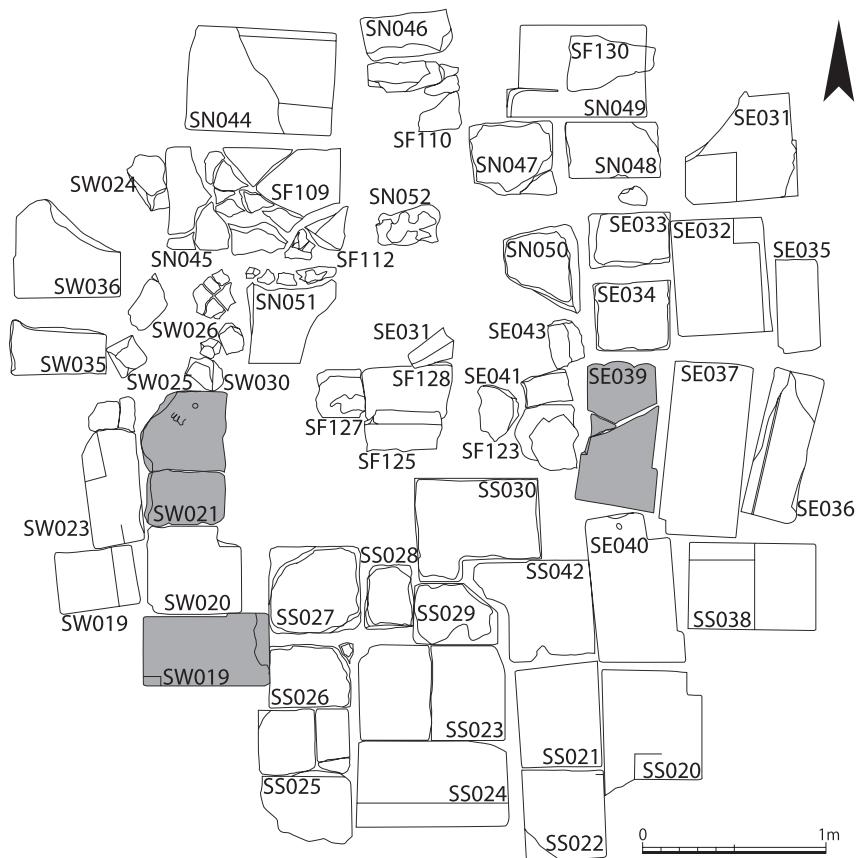


図2 南祠堂 N12 セマ配置図

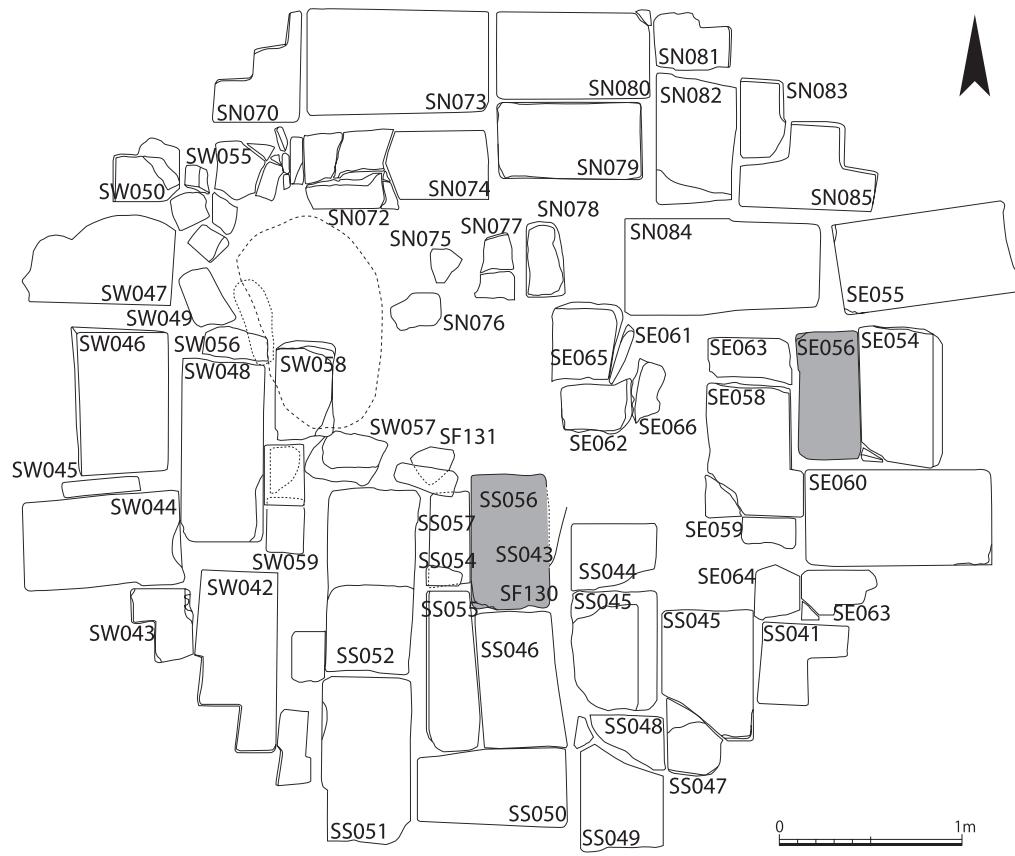


図3 南祠堂N14セマ石配置図

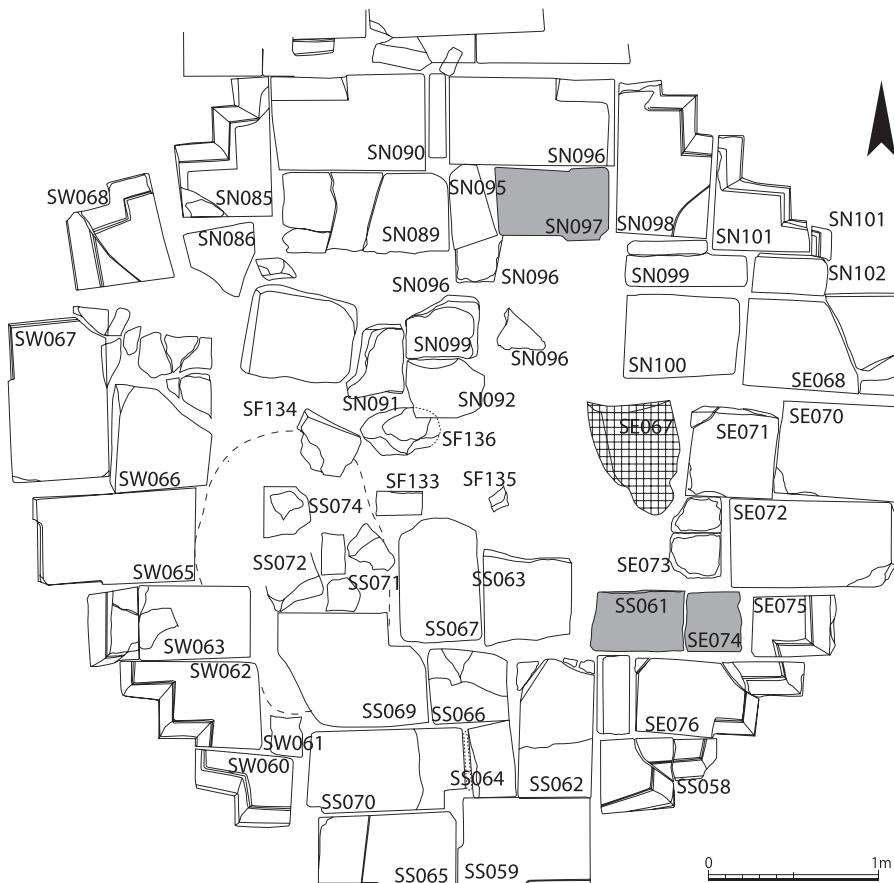


図4 南祠堂N15セマ石配置図

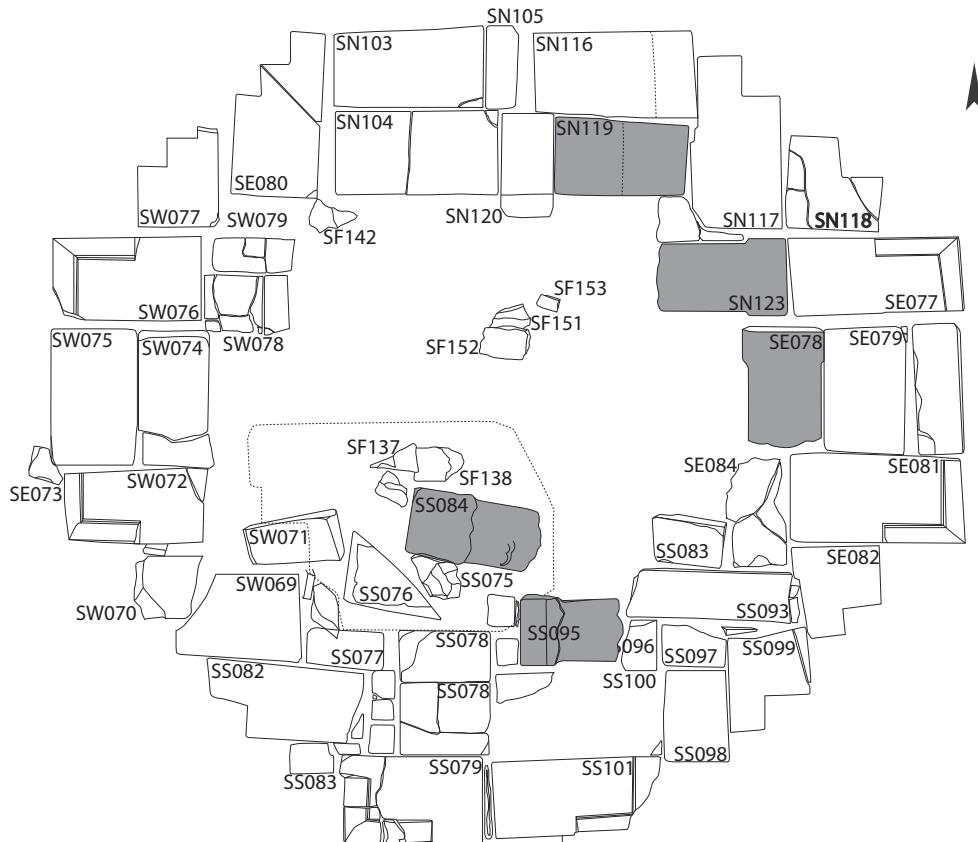


図5 南祠堂N16セマ石配置図

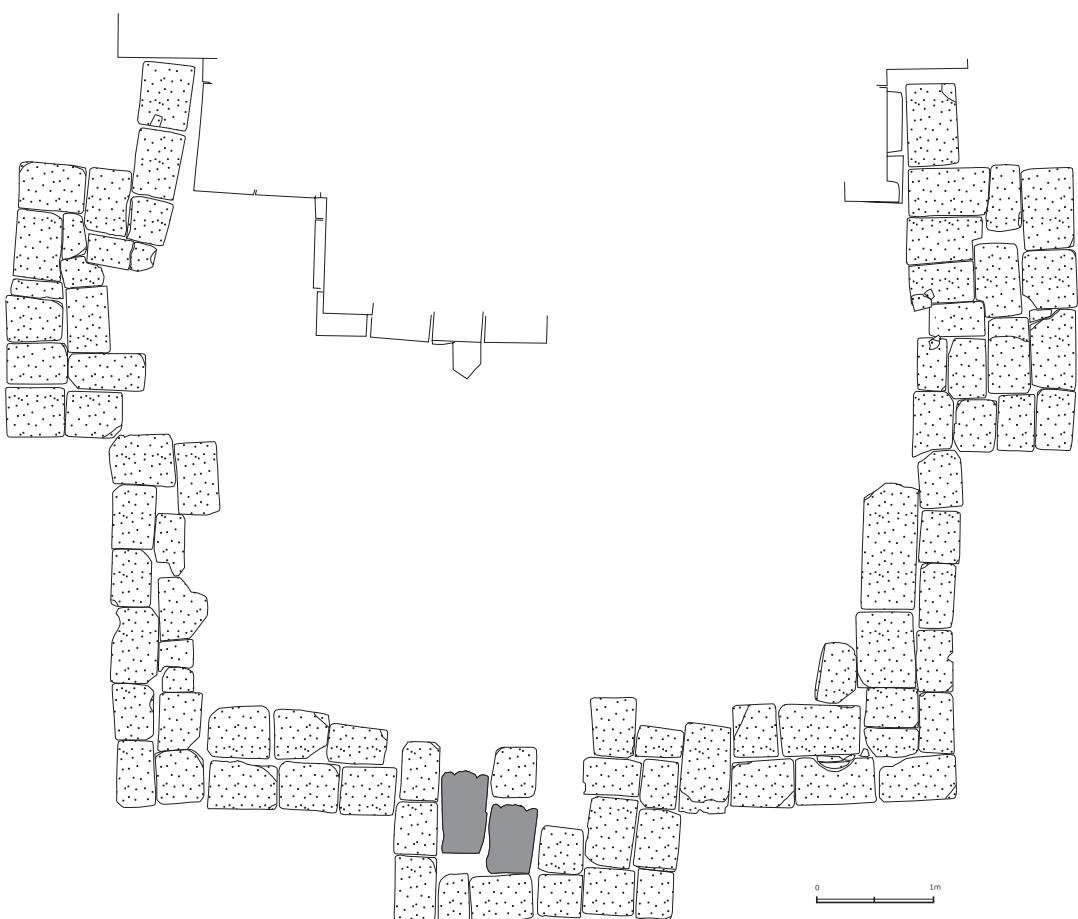


図6 南祠堂N24セマ石配置図



図7 南祠堂 N23 セマ石検出状況（南から）



図8 西トップ遺跡北辺中央セマ石現状写真